

復活（9）

1.生命表現の、その根源となる次元と繋がる原因(経験)が、人間の世界を包み込むようにして形となった、「太陽系の外側」と8章。その原因は、自動的に地球の外側とこの今を行き来し、どこまでも続く永遠の変化の時を、この無有日記に注ぐ。そしてその永遠は、‘存在の質’という、全ての基となる次元のその性質に触れ得る必要性をここに導き出す。

(※ここでの内容は、感じ取る次元さえも寄せ付けない、どこにでも在る物質(生命)のその元となる原因の形であるので、意味不明のままでも良しとする)

地球が自転する(回る)ことで生まれる、時間。その時間の流れを重要な要素とする、あらゆる物のその具現(具体)への原因。宇宙に在る炭素は、この地球では、地球の自転というその時間の中で、水と空気(酸素)と微生物と合わさり、形ある物となる。時間が無ければ、当然人間も居ない。

太陽から生まれた地球は、太陽の中心からの純粋な炭素を、その生命力の起源として形をつくり、生命たちは、それを基に形を持ち、時間の流れに乗って、変化を経験する。つまり、地球とそこでの生命たちは、同じ炭素でも、太陽の炭素という、太陽と地球との密な関係の中でのそれによって存在しているということ。太陽の光は、その独自の繋がりを最大限に活かす。

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

2.ところが、不思議なことに、この地球には、その太陽関わり
の太陽の炭素とは大きく質(次元)の異なるそれによって自ら
を成り立たせている存在が居る。そのあり得なさが、地球が辛
くなる LED に何の違和感も覚えない人間である。(肉食を普
通とする動物もそれに当たる)。彼らを通して地球が病まされ
ていくその事実は、太陽系の脅威となる。

その明らかな現れとなるのが、原因の変化を望まない彼ら
の本質。どこにも無いはずの結果の世界で、思考ばかりを使
い、時間の流れさえも、心底必要とはしていない。時間を創り
続ける地球に居ながらして、重く流れない停滞感(変化の無
さ)を良しとし、動きの無い腐敗と衝突(到達と差別化)の原
因を格好の材料に生きる。細胞は、地球からの栄養(植物)を
必要とはせず、蛇のように、他の動物の苦しみを食べる。

その存在たちの姿は、全てが人間のそれであっても、その
質(原因)の全ては、人間のそれではない。そこに、永遠に分
かり得ない程の炭素の違いが在る。彼らには、変化し続ける
原因の安定は無く、地球人としての基本(地球感覚)も、受け
入れ難い異物となる。

LED の、その時間を壊す程の負の原因を取り込む人間(の
無意識)によって、その自覚もなく心身を病まされてきた、普
通の人たち。「復活」は、地球のために、そこに在るその異質な
炭素(とその原因)の次元にまで働きかける。病まされている
ことも知らない人たちの復活は、自然界を生き活きとさせ、地
球をどこまでも元気にする。この9章での普通体験を、一生命

8. 太陽の光に包まれた地球は、太陽と繋がり、地球と一体化する生命たちの生きる場所。太陽の光には全てが在り、生命たちは、その光を生きる力に、地球が生み出すものを手にして、生を繋ぐ。人間も動物も、そのどこを見ても、そこには、太陽と繋がり、地球そのものとなる原因が在る。

太陽は、ずっとこの時を待っていた。待ち続けられる力を持っていたから、彼のための時間が出来、彼による新たな時間が、惑星たちの希望を形にする。地球は、これまでの地球ではなくなり、月は、動き出すその時を思い描く。みんなが、自由を感じる。

次第に存在感を失くし、その姿も見えなくなる、人間の世界に在り続ける、地球にとって要らないもの。太陽も地球自然界も、そこに争いや病気の原因は無いから、当然、彼らに生かされる人間の次元からは、それらは消えていく。そうではなかったこれまでを遠くに、元気になった太陽の光が主導権を握る。

地球からの無限大へと広がる原因によって、新たな時へと動き出した、太陽と太陽系。宇宙本来の意思は、その姿に安心し、太陽のこれからを爽やかに思う。太陽系のこれまでを知り、地球のこともその全てを把握する彼だから出来ること、彼にしか出来ないことを、見守り、支える。太陽の回転(のその原因)は力強くなる。(by 無有 12/09 2018)

として人間を生きる上での、永遠の原因とする。

3. 自由に変化に乗る蘇生型の炭素ばかりの地球に、そうではない停滞と腐敗を基とする炭素が、ある時登場する。それそのものとなる生き物としてそれがこの地上でうごめき出したのが、肉食を普通とする動物の世界(次元)で(その手前には毒性を備えた植物がある)、後に蛇、そして現代に近づき、奇形(土偶の原型)を経て増殖した、嘘の人間へとそれは繋がる。それらは、それまでの生命たちと限り無く同じであっても、その大元となる原因は、どこまでも異なる。

この地球には無いはずの異質な炭素が存在し得てしまった原因のその背景には、月の哀しみの姿が在る。自転が止まってしまうその時まで、月は、(地球から生まれた時のまま)太陽からの炭素を自らの本質として生きていたが、あり得ない負の力でそうではなくなる流れに巻き込まれた時、生命力の源となる太陽との繋がりには途絶え、その炭素に異変が生じる。

それは、形を成す要素でいながら、変化を拒み(止め)、仕事は同じでも、その中身(方向性)は全くそれまでのものではなくするというもの。その信じ難い現実も、月が止まってしまう程の(天体規模の)災いを引き起こす原因の力がそこには絡んでいるため、恐ろしく危険な負の奇跡として、その事実は先行する。停滞しつつ安定を維持するという、実に不自然極まりない本質を備えるその物質は、地球を無生命化させようとする意思によって、月の次元から、この地球に持ち込まれる。

4. 生命体も含めたあらゆる物質が形づくられる時の、その重要な役を担う炭素。その炭素の質が本来とは異なるために生まれた、不自然・不調和な原因を普通とする存在たちは、初めからそうであるために、そのことへの違和感は一切無い。自然界は、それを理由に、どこまでも病み続ける。

その割合は、地球全体では 1%程であるが、元々この地球には無かったことを考えれば、その事実そのものが危うい。そして、その割合の内実に含まれる、一生命としての原因(心)を持たない人間の増加と、彼らによって生み出される、非生命的な物や形。そのことは、この先、地球全体が他の天体や月のようになってしまうという、その地球仕様(版)の負の連鎖がより強力になることを意味する。太陽からの炭素が減少し、月からのそれが増えるというその負の原因は、確実に衰退の時を引き寄せる。

本来を外れた月からの炭素は、その不穏な性質の働きを、同質の別の炭素によって支えられ(に支えさせ)、安定感を維持する。物体としての形ある次元には無いその炭素は、重苦しい黒い雲や湿気を自由に作り出し(特にこの地で)、隔たりや滞り(変化への抵抗)を本心とする人間の、その生きやすさの燃料で居続ける。

5. どんな性質の物質にも、そうであり続けるためのその作用となる原因があり、当然この地球に在ってはならないその月からの炭素にも、その独特の原因がある。その炭素を基とする

入り込んだ、本来地球には無くてもいい物質(粒子)のその原因となる宇宙線(放射線)によってもたらされたもの。太陽が元気であれば、それらは地球には届かない。仮に届いたとしても、地球は、それを容易に浄化する。

太陽系の全ての天体の総質量が太陽の 0.1%程であることを考えれば、本来の姿を取り戻した太陽がどれ程の能力を太陽系全体に向けて働きかけ(発揮し)得るかを予想できる。この地球では、10 章で登場した不自然・不調和の原因そのものの物質が、力無く、姿を消していく。人間の意識も、その原因深くから浄化され出し、地球自然界は、地球のものになる。風も水も、光も空気も変わる。

体験的知識を重ねつつ、知識(思考)世界から自由になって歩き続けた、「再生」と「復活」。そのひとつひとつの経験は、力強い大きな原因となって、太陽を動かす力となる。その時を迎えれば、後は太陽にお任せ。そのための原因を、共に楽しみながら太陽に届ける。かつてのように、彼の自転周期が 430 時間弱となるその原因を地球から発信し続け、その厚みと幅を増大させる。そして、それを活かしてもらう。

それが原因の世界(次元)で可能となることの、その地球を包み込む程の喜び。感触・感覚の域を軽く通り抜けて、多次元的に(地球規模で)具現化される、そこでの真の普通。地球のために太陽が必要としていた原因と、太陽のために地球で創り続けた原因が、ひとつになる。

た事実がそこに在っても、次なる現実のその原因への働きかけはどこまでも自由となる、原因の分母が増大することによるそこでのその EW の普通。太陽の自転のその新たな原因がそれにより安定することで、彼は、それまでの仕事を余裕でこなせる力を拡大させ、各天体にも、それに反応させ得る時を創り出す。

地球感覚を普通とする(あたり前に地球を大切にする)人々たちにとって、太陽が本来になること程、嬉しいものはない。太陽の自転が速くなり、その活動の(原因の)次元が高まれば、彼は、普通に、公転時の地球のその歪な姿を直す。地球空間に降り込む不安定な破壊型の粒子も、その威力は大きく削がれ、地上に在る、それまでのそれ関わりの負の蓄積も、浄化されて、姿を無くす。他の天体たちも、命を吹き込まれる。

すでにそうである時を生きることから生まれるそれらのことは、太陽に望まれ、この地球に託された生命たちだからこそ、その人間時間が創り出し得る原因。地球感覚は高まり、太陽は動き、彼は、真っ先に地球を変える。生命たちは、地球と遊び、太陽を応援する。

7. 太陽が、その動きを執拗に抑え込まれて、本来の元気を失くすことが無ければ、地球の歴史は大きく違っていて、この数百年間の人間による争いや衝突(病気や差別)は、全て存在しなかったと言える。肉食動物のその不自然な生も、人間の、そこに在る非生命的な感情(価値観)も、元を辿れば、地球に

動物も人間も皆、脳や内臓を持ち、同じ生き物として生を営む姿がそこに在ることを考えれば、その原因は、生命力のその元となる次元のそれであることが分かる。つまり、同じ人間(動物)でも、生の大元が違うということ。この太陽系では、それがどんな生であっても、そこには(その原因には)物質が在る。

その物質が、ヘリウムである。それは、生き物が何によって生きている(生きられる)かというその生の根源となる次元のもので、人間の心臓も、それによって(その中心核を通る意思の力と融合して)動き続ける。形あるものが創り出される時のその重要な原因に参加し、その後退いて、それがそうであり続けるための仕事を担うヘリウム(の原子核)は、この地球を含めた宇宙空間で、創造と生命力の基礎を創り続ける。

地球感覚を持たずに非人間性を生きる人や獰猛な動物たちは、その性質(次元)が変異したヘリウムで生きていると考えてよい。そしてその物質が、天体たちが物化して行ったその原因の力であり、それは、この地球で、「再生」にあるような非生命的な現実を平気で作り出す。その天体規模の異常な存在(歪なヘリウム)が、ここまで書いてきている破壊と腐敗の意思の、その正体の一部とも言える姿である。

6. その次元の EW をさらりと表現するそのために迎えた、この時代と「復活」。この地球を本来へと戻すために姿を手にしたのが人間だから、任された以上、確実に責任を果たす。それも遊び心で。

無有日記は、そのための必要とすべく原因を言葉に乗せ、その意識もなく為し得る表現の質を高めていく。そして、これまでの全てが新たな原因に変わるための、その原因に自らがなろうとする生命たちの存在そのもの(多次元的な本質)を力強くする。ふといつのまにか、炭素やヘリウムの次元の浄化を楽しむ普通の人間が、そこに居る。

物質の歪さは、他との融合を退ける、その内なる不穏な意思。化学的作用を同じくしても、物理的負の影響力を潜める、その質(質量)の危うさ。水素や酸素、窒素と共に形を生み出すまでは、その違いは分からないが、その後続く生命体験の質を通して、それは分かり出す。

ところが、その機会をも容易に潰す意思がそこには在ったため、地球の外側へと伸ばし得る原因を、この人間時間で育み(呼び醒まし)、太陽時間との融合の時を思い出し得る機会を、ここで手にする。EW は、いつ、どんな時も、普通で、自然。気づけば、太陽系の生命(天体)たちが伸びをする。大きな始まりの時に、これまでの終わりを共に迎える。

7.地上(大気中)での異常なヘリウムの割合は、驚く程僅かであるが、その負の原因の仕事は、恐ろしく際限が無い。その存在の元となる破壊と支配の意思は、それにより生命体が形成されることで水素や酸素が不自然さを普通とすることを活かし、人間に、地球には無い(無くてもいい)ものばかりを作らせ、停滞感を拡大させる。支配下の彼らは、自分たちには何でも

度の活動(頑張り)は余儀なくされ、それは続く。

太陽は、その原因の実を伝え、宇宙本来の意思は、それに応える。15 億年以上前には何も無かった、太陽と天体たちの、そこでの普通。自分のことより、天体たちの姿を少しでも元気にしようとする彼の姿勢は、これまでの原因全てを浄化し得る「復活」の始まりを、この時代に引き寄せ、自らの(太陽の)EW を普通とするこの 11 章の時を創り出す。

太陽系の天体たちが病まされ出すその時よりも遙か昔、そこに黒点は無く、厳しきや不穏な原因への浄化作用となる独特の(強度を高めた)活動も、太陽は知らない。その頃の記憶に触れ得る、この時の進化し続ける普通は、太陽の望みを形に、彼の、無くてもいい気負い(の原因)を外す。地球から他の天体へと、その原因を繋ぎ、太陽を本来にする。

6.要らない経験をし続け、黒点という形でその姿を表に出すことになるその時より前、太陽は、今よりずっと速く自転していた(約 18 日周期)。その回転が鈍らされたまま、ずっとこの時まで巨大な負荷を抱えつつ、太陽系全体を支えてきた、太陽。15 億年という時を経て、彼は、この時代に希望を手にする。すでにそれは始まっていて、回転は、この数十年で、数日分のその負の原因が浄化される(原因の世界では数日速くなっている)。

太陽が抱え続けてきたその負の原因への浄化は、この「復活」に引っ張られるようにして強力になる。形として固定され

停滞型の粒子(物質)は、地球時間のその原因が大きく変化に乗ろうとするこの時、世界各地(特にこの地)での、太陽の光を執拗に遮ろうとする黒い雲や突然の雷雨といった現象となって、その本質(の原因の意思)を顕にする。

太陽の力強さが安定することで、それまで見られなかった不安定な力が(居場所を無くして)姿を見せ、地球空間にどれ程の要らないものが染み込まされていたかを分かりやすく形にする。天候が時代の好転反応の中に入り込めば、それは、地球が、深くから浄化され出したということ。

その当然のプロセスとして、湿度は低くなり、過ごしやすい空間が普通となる。環境的な生きにくさは、元々この地球のどこにも無く、太陽もそれを望まない。病気の原因も力を持てなくなり、不健全な方向性も、その土台を無くす。太陽の余裕ある活動は、地球に無くてもいいものを、簡単に処理する。

5. 太陽の意思を感じれば、フレア(爆発)という出来事が、彼にとっては辛い現実であることを知る。黒点もそう。それらは、太陽の不自然さの現れ。

黒点は、太陽もただ耐えるしかない恐ろしく強力な(破壊力のある)宇宙線が、銀河の腐敗を愉しむ程の意思によって、太陽に向けて放射(衝突)され続けてきているためによるもの。それへの受容と仕向けられようとする次元の回避を重ねつつ、自然と(その必要性から)そこには黒点という姿が生まれ、そのことによる極度の不安定感を調整するために、要らない過

ない、栄養価の無いものや不健康なものを摂り込み、身体細胞の次元から、腐敗の原因を強めていく。

そのヘリウムの次元にまで辿り着けた、無有日記の原因。ずっとそうであることが初めからそこには在ったから、さりげなく普通に、そこで遊ぶ。人間社会の歪な普通を刺激しながら、その元となる、生命世界のその原因の異常さを修正する。

本質は不安・不安定であるのに、安定感を手にした、不安定そのものの歪なヘリウムや炭素(水素、酸素)。その手法は、状態を維持するためにいくらでもその原因が自然界から補われる安定の世界(次元)を不安定にさせて、その無くてもいいはずの負の経験の原因を、融合の主導権を握りつつ自らに取り込み、そして不安定をそのままに安定して(させて)しまうというもの。

それは、生命たちの住む地球への措置として取られた、これ以上無い方法。つまりそれは、人が苦しみ、動植物たちが辛い状況に居ることで、安心して生きる(生きられる)ということ。それが破壊の道具として際立ったのが、(LEDのある)この現代である。

だから、健康と平和の原因で、病気や争いの負の原因を力無くさせていく。不安・心配や問題事を材料とする価値概念から離れ、理由も目的も要らない安心そのものの空間を創り続ける。捕らわれる必要の無くなったありのままの安定は、不安定の原因を存在させることはしない。

8.石灰石を基礎に、4つの物質(8章)のその純粋な能力を活躍させ、炭素とヘリウムの地球次元での本来を安定させる。そのことを地球は喜び、その安心に活かされて(守られて)、生命たちの脳は負荷を外す。生きることがそのまま喜びとなる時を普通に、共に生かし合う地球(感覚)を生きる。それまで在った滞りや衝突は、居場所を持たずに、その姿を無くしていく。

そのことを遊び心一杯に、楽しみながら表現する生命たち。彼らはただ好きなように生きて、時を癒し、ありのままに居て、健康と平和の原因を広げていく。自然界もそのことに反応し、再生の時を経て復活へと動き出す地球の姿に、皆の心は熱くなる。水も空気も光も、太陽の笑顔を映す。

その全ては、この無有日記に集う人間たちを中心に躍動し、この時を待っていた仲間たちも、次々とそれと融合して、回り出す。その自然で、滑らかな流れの中、何もしなくても何かが変わるその原因は強く大きくなり、余裕と安心が時を包む。地球から発信される人間発の変革の力は、太陽系の仲間たち(天体)まで届く。

いつしか、復活の次元は普通のこととなり、人間も、この地球での仕事を終える。その時の地球は、そこに居る(居られる)人間と共に、自然で優しい風景を繋ぐ原因そのものになる。どこにでも行けて、どこでも、どこまでも生きられる、健康と平和だけの世界。太陽はいつもそこに居て、月も元気に回っている。そんな未来の原因が確かなものとなるこの時に、みんなが居る。(by 無有 12/02 2018)

この時代まで、厳しく、大変な時を、そうと意識することなく生きる。力(活動)が弱まると、と同時に、宇宙からの放射線が地球に降り込んで、本来無くてもいい現実がそこで生み出されてしまうことを知る彼は、そうにはならないよう、力を落とさざるを得ない時でも、それ(強力な放射線)を自らに取り込み、処理し、地球を支える。そうはさせない負の力が強力でも、銀河系の異端児そのままの本質を生みの力に、太陽系を引っ張り続ける。

そして、この「復活」のある時代、重石のようにして在り続けた黒点がその存在感を無くす程の望むべく変異(の原因)が、この地球から生まれる。それにより、太陽は、厳しさの裏返し、の活発化を不要とする流れに乗れ、地球に生きる生命たちのその原因に呼応しながら、新たな自分となる(元に戻り得る)時を迎える。彼は、光の質(次元)を変える。

4.地球に在る物質のその原子レベルの姿を容易に変質・変異(破壊)させてしまう、宇宙(銀河)からの、不穏な意思の乗った放射線(宇宙線)。太陽の活動を抑え込む程のある種(次元)の放射線の威力に支えられ、それらは、永い年月の中で、かなりの量地球に降り込む。そのことが、廻り回って、不安定でありながら安定した力を持ち得てしまうヘリウム 3 や炭素 13 を生み出し、それらは、動物世界での凶暴さ(肉食)や人間世界での地球感覚の無さの基となる。

その次元から派生した、いくつもの、重く動きの無い破壊・

復活（10）

陽は繰り返し痛みを覚え、何度も方向性を歪められ、力を落とす。それでも持ちこたえ、傷を負ってもどうにか踏ん張る彼は、力の限り、それまでのように惑星を生かす。

その時以来、太陽は、本当(本来)の姿を忘れさせられ、そうであるべき普通を見失う。そのために、天体のひとつひとつが力を無くす流れを余儀なくされ、太陽系は、その調和ある安定感を鈍くする。

太陽は、自分を崩壊(破滅)へと向かわせる意思によって放り込まれる、その強力な破壊力と透過力を持つ放射線をただ受け止め、各天体に影響が及ばないように、可能な限りそれを抱え込み、そして(自他共にムリのない流れで)独自の知恵で放出する。その全てを学びに換え、柔軟さと逞しさを高め、銀河(太陽)時間に沿っても尚存続できる原因を見出し、その経験を作り出す。それは、現在も同じ。何があっても動じないその姿勢によって、この地球も、地球でいられる。

3.地球空間に入り込み、粒子の次元で超自然的な現象を引き起こす、宇宙線とされる、地球外からの放射線。地上に生きる生命たちは、太陽によってそれが処理される別次の経緯を基に、生きる力を失わずに、時を重ね合う。太陽は、地球自然界がそのままいられるその原因のところで、自然界にはどうにも対処し難い部分を快く受け持つ。

太陽時間における昔、太陽は、その普通がそれまでに無い負荷を強いられるという、あり得ない現実を経験し、そのまま

1.宇宙の基本要素となる水素。地球という自然界のその本来の姿を基にその次元(地球空間)を観る時、そこには、信じ難い不穏な水素が在ることを知る。それは、宇宙と非宇宙という2つの根源的意思を生み出してしまう程の影響力を持つ、非生命的な原因の力。太陽は、それを尽く嫌い(その原因を退け)、調和ある水素を元とする空間を独自に創る。

太陽は、純粹で、他との自然な融合を普通とする水素を力に、非宇宙の意思を限り無く遠ざけ、そのことを元とする健全なヘリウムを生み出して、そこでの核融合を基に、生命力の原因を繰り返し創り続ける。太陽によって創り出された太陽系の天体たちは、太陽から注がれる光を生の基本材料に、分け与えられた物質の特性を活かし、その中で地球は、いくつもの天体規模の偶然を要素に、水を生み出す。

もちろんその水は、地球上の全てを活かす生命の力であり、そこに太陽の意思も含まれる。太陽は、他には無い地球独自の営みを応援し、その無限の可能性を微笑ましく思う。太陽系全体が、地球のその姿に安心する。

惑星たちが太陽の周りを元気に回り続けることで自然に維持される、太陽系の調和と融合。そこに在る水素は、生命力の力強い原因そのものとなり、太陽系の外側にまで、それは伝わり出す。

復活（11）

2. その素朴な太陽の姿勢を退けて太陽系に入り込んだ、非宇宙からなる、停滞と破壊の意思。それは、廻り回って、この地球にそれまで太陽系のどこにも無かった非生命的な性質の水素(の基)を流し込み、そこでの自然な変化に、重苦しい負荷をかける。

その負の力の向かう先は、地球が太陽と共に創り出した、生命たちの生の源泉で居続ける水を破壊すること。永い時を経て、地球は、その水素の威力で不自然さを普通とする時空となり、それに耐え、その全てを受容する生命と、彼らの不自由さの上で自由に生きる異常な生命とに分かれ出す。

その後、地球の望みからかけ離れた時が連ねられる中、地球は、現代に至り、支配・征服欲をあたり前に動植物たちの生を弄ぶ(非生命的な)人間の増殖を受け入れざるを得ない程、歪で不安定な水素や酸素、窒素に満たされていく。炭素もヘリウムも、元々地球には無かった性質のものが妙な存在感を見せ、多数を占める心を持たない(人としての感性の無い)人間の生きる力に利用される。

そのことは、恐ろしく危うい状況が、それを普通とする人に支えられて、あたり前の風景としてそこに在るということ。それは、水でありながら、(地球が安心する)水本来のそれではない水によって生まれ、育ち、生きる姿が、そこに在るということ。地球(表面)は、辛く切ない不調和な次元に居続ける。

3. 水素からヘリウムが生まれ、そこから炭素が出来、そしてい

1. 太陽系誕生の時から、天体たちを守り続けてきた、太陽。十分にその仕事を行ってきているようでも、それが完璧ではないことを知る彼は、そうであるその理由を受容しつつ、出来ることの質を低下させないように、太陽系全体のその活力の原因でい続ける。

そんな中、奇跡という名の天体規模の普通が地球で生まれ、太陽は、それによって自らも抱え込まされている巨大な負荷が浄化され得るといふ、考えもしなかった新たな可能性の原因を、そこに見る。各天体の記憶を備える生命たちも、地球時間の中に在り続ける負の原因を通して為される EW が、太陽の本来の姿(太陽が癒される次元)へと繋がっていることを確認する。

太陽に生かされるという場所から、太陽を癒すという世界で遊び出す、生命たち。その時を迎えれば、それも普通。太陽の、その無くてもいい経験の原因に少しでも触れれば、彼は、光を広げて、この地球を抱きしめる。

2. およそ 15 億年前、太陽は、その姿を喜ばない(銀河の)存在の意思に監視され、その全てを無きものにしようとするその破壊の力に見舞われる。その内実は、宇宙線とも呼ばれるある次元の高強度の放射線の類であるが、その威力により、太

自分たちの経験が活かされることを喜び、安心して希望を膨らませる。地球での人間の活躍に、彼らは感謝する。

「再生」の時を経て、この「復活」から始まった、人間発の、地球時間の修復と太陽時間への働きかけ。それをひたすら積み重ねることで引き寄せたこの時代環境で、人間は、地球上での全ての病みの原因を浄化し得る、全く別次の原因に触れる。それこそが、地球の喜び。そして、太陽の安心。総まとめのような実践の時を任された生命たちは、地球のために、人間時間(身体表現)を大いに活かす。

人間の歴史のどこにも無いこの時を機に、人間の時空は変わり、すでにそうである原因が強まるこれからを以て、変化し続ける原因のままの生命の歴史が創られる。結果(過去)の次元は、勢い良く浄化され出し、地球は、地球らしく自由になる。そして気づけば、月も力を取り戻す。

「復活」は、どの章のどの節も、それぞれが多次元的な生命の EW であり、それとの融合を普通とする人の中で、それは自他の原因を変え得る自在な力となる。そして、この10章は、まさに生命としての責任、人間としての仕事(実践)のその原因として、地球と共に、宇宙の在り方にまで影響を及ぼす力へと成長・進化する。その EW と遊び、繰り返しそれを楽しみ、そのためにここに居る(来た)ことを確かにする。宇宙空間の希望の星(地球)が、皆の力で、皆と一緒に、どこまでもその輝きを届ける。十数億年振りに、太陽が笑った。(by 無有 12/05 2018)

くつもの惑星が生まれる程の時を創造し、地球では、酸素が仕事をし始める。その太陽の EW は、そのまま地球本来の原因と繋がり、そこで生きる生命たちも、太陽の意思と融合することで、その自由な活動に健全さと調和の原因を重ねる。始まりが純粋さそのものの太陽は、その後もずっとそのまま、どこまでも限り無く、永遠に、純粋な太陽で居続ける。人間も、動物たちも皆、太陽である。

その太陽の想いが具現化した、地球。そこには、太陽の意思を通すことで成り立つ地球次元の物質だけが在り、それらが行き交い、融合する中で、生命たちは育み、変化を経験する。そこに在るものは、初めからそこに在り、どこまでも在り続けるもの。途中から参加するものも、調和をテーマに変化に乗り、共に太陽の意思を通し、地球となる。

そこに在り、在り続けられる(人間関わりの)主な物質。それは、水素 2 とヘリウム 4、炭素 12 と酸素 16、そして窒素 14。それらと物(元素)は同じでも、質(質量数)が異なるそれ以外のものは、不安定感を作り出すことで安定感を維持しようとする、元々地球には無い、不安定そのものの物質である。それら(の原因)は、地球に入り込み、嘘の水を生み出し、無くてもいい物を作り出して、非生命(異生体)を生きる。

4. 全ての原子には、それぞれのその中心(原子核)に固有の固定した数の陽子と中性子が在り、それらが個性ある融合(合成)を重ねることで、物質は存在することになる。陽子は、

水素の原子核のこと(とされている)。そこに在れば、それはどんななものでも、水素を基とする物質であるということ。

水素から始まる太陽の活動によって誕生した、太陽系。この地球も、他と同じように、その成り立ちの原因をどこまでも遡ると、太陽を突き抜けて、何も無い水素だけの時空に辿り着く。その時間の無い次元から形を手にした太陽は、後にいくつもの時間を創り、その中でも、地球時間を可愛がる。

ところが、この地球には、元々そこには無かった非生命的な水素(水素 1)が入り込んだことで、その本来の在り様は大きく乱され、その上で作り出された、陽子と中性子それぞれの数が異なる物質(酸素 17、炭素 13etc.)がそこで力を持ち、増大、安定したことのその原因を土台に、現地球の物理空間の基は構成されることになる。自然界の違和感でありながら、多数にはそうではない、重く流れない空間や不健康な湿度は、そのためでもある。

そもそも、陽子の概念が、水素 1 という歪な物質を基に思考で扱われたために、事は不要に複雑化し、生命の真は見えなくなる。そうである原因(意思)を無視して、結果から始まった世界は、不安定でありながら(安定感を持って)存在し得てしまう次元を、研究の対象としてどこまでも増大させることになる。

5.その原子核に、陽子と中性子を 2 個ずつ持つ、ヘリウム 4。それによって合成される炭素 12(各×6)、そして酸素 16(各

の陽子と、その元となる非宇宙(非地球)の存在の意思。それへの働きかけは、人間が何より経験すべく、一生命としての生への(真の)癒しであり、そのことで、太陽は、地球への光(電波)を安定させ、地球は、安心して、磁気(磁場)を高める。

そして、水素 1 を基とする歪な物質(炭素 13、窒素 15etc.)は、確実に姿を消す流れへと変化に乗り(乗せられ)、地球自然界とそこで生きる生命たちは、不健全さや不自然さを知らない生命本来の普通を生きる。地球に無いもの(合わないもの)を作り、地球に無い原因からのもの(不安、差別、自然から切り離された思考食 etc.)で生きている存在たちは、人間も動物も、その存在意義を無くしていく。地球の治癒力は高まり、自浄力も増大させて、新たな地球時間のなかで全てを生かす、病むことの無い地球本来の姿が、そこには在る。もちろん、人間もそう。

数限り無い人間とその感情を巻き込んで巨大な負のかたまりと化した、地球規模の病みも、その大元の原因の中心に在る(居る)のは、実に小さな、怯えそのものの(逃げ腰だけで出来た)存在である。それに下支えられながら、非生命的な時を生きる、多数の人間。彼らの中で生じる変化は、次なる生を選べない程のそれになる。

10.地球は、太陽に守られ、自分にしか出来ないことを、当然の役目として淡々と実践する。人間は、地球に支えられ、人間にしか出来ないことをして、地球を守る。他の天体たちは皆、

基に連ねられた、この地球自然界の歴史。そのことを考えれば、この現代の人間関わりの問題事は全て、その存在の意思と繋がっていることを知る。人間も地球。そして太陽。彼ら(地球と太陽)が経験することは、地球に生きる人間も、その在り様深くで、人間仕様として同質のことを経験している。

水素 2 と、それを力無くさせようとする非宇宙の物質(存在)が在る宇宙(その物質の次元を宇宙とすれば、水素 2 の次元が非宇宙となるが…)。そして、太陽系という調和ある空間の、その中の地球で形を持ち得てしまった、その存在の意思による水素 1。それを、原因の世界の地球感覚の常識とする。それを基に、水素 1 の陽子のその元となる次元への EW は普通となる。その普通の中で、生命を生きる人間の、その無くてもいい不調と不自然さの原因は居場所を無くす。

9. 人間を生きるというのは、地球(感覚)を生きるということ。自らが経験する(させられる)不要な不自然さを通して、地球が経験し続ける不自然さの、その元となる原因に触れること。そして、地球を、本来の在るべき姿へと戻し、人間も、その意識もなく本来になる。それが人間の仕事。地球の元気は、太陽系をも元気にする。

そのために人間が、この地球に生きる一生命としてすべきこと。それが無有日記の実践であり、それを経て普通感覚で為し得ることになる、水素 1 の原因への EW である。水素 1 のその原子核に在る、無生命化の原因そのものの異次・異質

×8)と考えていくと、ヘリウムを生み出す水素は、質量が 2 であることを普通に理解する。

その単純な原因の次元が、そうではない認識を普通とする世界に占領されてしまう程、自然界は不安定で不調和な物質に包まれてしまっている、というのが、原因の世界から観た、この物理世界(次元)の真である。太陽も地球も、そのことを知り、新たな未来へと動き出すその原因の仕事を、人間(生命たち)に託す。

多くを占めれば、その本質が異常であっても、そこに居る人にとっては普通となってしまう、不安定の中の安定。それが地球環境全体にとって成されたために、時代は、恐ろしく非人間的な原因に力を与えてしまう程になる。そして現代、それは、天体(地球)規模の負の威力へと拡大する。

地球自然界への責任の無さも、原因(の質)を退けた非人間性からなる生き方も、元々この地球には無いはずの(在ってはならない)物質が、人間や動物の生の材料となっているからである。その物質への対応は、この地球にとって、最も重要な EW となるもの。それは、人としての本来を持ち合わせない大多数の、その形無き原因に潜む非生命的な(無生命化を企てる)意思への対処(浄化)でもある。

6. この現代、自然界が最も辛くなる LED 照明を放って置ける人のその姿は、細胞レベルから、それはこの地球に生きる生命本来のそれではないと言える。つまり、地球には異物となる

物質で生きているということ。それでも普通でいられる要素(理由)は、人間の知の外側で作られる。

彼らは、地球の生命力を無きものにしようとする意思と繋がる、水素 1 を元に、炭素 13 や酸素 17 を生きる力に取り込む。生命源も、ヘリウム 3 を活かす。その不安定の中に居れば、それは安定。それがこの地球での実際であり、人間本来でいる人は、その不安定に付き合わされ、彼らの安定に必要な原因を不要に作り出されながら、不本意を生きる。

病気や問題事の原因(存在)を無くそうとはしないこと。不安や怖れのその元となる理由を浄化しようとはしないこと。そして、生命食(全粒穀物食)を退け、動物食には抵抗が無いこと。それらのことから、その存在たちが、この地球に生きる人間として備えるべきものを持たないということが分かる。彼らのその生命としての不安定は、形ある数の力でそれを非生命的に安定とし、地球を腐敗へと導いていくもの。争いや差別の絶えない世も、彼らには普通のことである。

7. 太陽は、太陽系には無縁であるはずの物質に地球が汚染されていることを知る。地球は、それが肉食動物の本性を土台とする非人間的(非地球的)な存在の生きる力となっていることを知る。そして、生命たち(地球感覚を普通とする人間)は、自分たちの仕事を封じるそのために、その次元の人間が増えて来ているということを知る。

太陽と地球が把握するそのことを、体験的知識として、人

間理解するに至るこの時。それが意味するのは、何億年も続いた、この地球での非生命的な時間が終わるということ。ずっと地球が待っていた、その時が創り出されるということ。太陽も、これまでの太陽ではない。人間も、人間にしか出来ない仕事のその質(原因)を高める。

その時のこの「復活」での EW は、作られた思考世界の中では同じとされながらも、その実、その本質・本源は全く次元の異なる、安定に対する不安定の中の安定のその原子(原子核)の中身。そこに在る陽子、中性子の次元の認識と実践は、全てを本来をテーマにリセットし得る程の、根源的浄化の機会を生み出す。水素 2 のその形無き原因の意思の復活(取り込み)が、その時を引き寄せる。

8. 宇宙空間に在る水素の本源を抑え込み、その性質の働きを不自由にさせて、その中身の基本要素(の構造)まで狂わせようとする存在。天体の破壊を遊ぶそれは、地球内に水素 1 という異常な物質を登場させ、そうとは分からせずに他の殆どの物質も容易に変質させて、地球全体にあり得ない負荷をかける。宇宙線とされる次元をも利用して、不安定を安定させるために、したい放題のことをする。動物世界での獰猛さ(凶暴さ)や人間世界での否定感情(差別、支配欲 etc.)は皆、その地球規模の負の原因をそのままその土台(燃料)とする、本来無くてもいいものである。

異質なものに覆われ、侵された地球の、その不穏な時空を